

## 日本統治期台湾での日本人画家と

## 美術運動

河原 功

森 美根子著

日本統治時代台湾  
語られなかった  
日本人画家たちの真実四六判 246頁  
振学出版／星雲社発売  
[本体 2,000円＋税]

日本統治期台湾で活躍した日本人画家として、石川欽一郎、塩月桃甫（本名・善吉）、立石鐵臣は比較的良好に知られている。というのも、「石川欽一郎展」が一九九二年に静岡県立美術館で、「塩月桃甫展」が二〇〇一年に宮崎県立美術館で、「立石鐵臣展」が二〇一五年（東京銀座の泰明画廊）と二〇一六年（府中市美術館）に開催されたからだ。なかでも府中市美術館での「立石鐵臣展」は、新聞各紙が紹介し、NHKの「日曜美術館」での放映もあって、日を追うごとに来館者が増え、「図録」は会期なかばで完売となる盛況ぶりだった。

この二つの「立石鐵臣展」に大きく関わったのが、台湾美術評論家の森美根子氏だった。森氏は、日本統治時代台湾の美術に関して豊富な知識を有しているばかりか、台湾美術の展覧会企画でも活躍しているのだった。

台湾では日本統治時代の台湾美術に関する研究が進んでおり、書籍も数多く出版されている。容易に入手できるものだけでも、謝里法『日據時代台湾美術運動史』（藝術家出版社、一九九八年で五版）、李欽賢『臺灣美術歷程』（自立晚報社文化出版部、一九九二年）、顏娟英編著『台灣近代美術大事年表』（雄獅圖書、一九九八年）、楊孟哲『日治時代台灣美術教育』（前衛出版社、一九九九年）を挙げるができる。ところが、日本では日本人の手になる台湾美術の研究書・参考書は少ない。頼りになるのは森美根子氏執筆のものだと言えよう。

森氏には前著として、『台湾を描いた画家たち 日本統治時代画人列伝』（産経新聞出版、二〇一〇年）がある。これは、台湾で活躍した美術家二一名（日本人は石川欽一郎、塩月桃甫、

立石鐵臣の三名。台湾人は黃土水、陳澄波、蘭蔭鼎ら二八名）を紹介するものだった。

本書『日本統治時代台湾 語られなかった日本人画家たちの真実』は、その延長線での二作目である。写真版も豊富である。台湾近代美術と深く関わりがあった石川欽一郎らの日本人画家、台湾美術を牽引してきた台湾美術展覧会（いわゆる「台展」、一九二七—一九三六年の一〇回）と台湾総督府展覧会（いわゆる「府展」、一九三八—一九四三年の六回）、その影響で結成された幾つもの美術団体の紹介が中心となる。

◇ 本書の構成は次のとおり。

## 第一章 清朝芸術と日本人との邂逅

### 第一節 清朝期台湾の美術（書画）事情

### 第二節 日本統治時代初期 日本人と台湾人を結んだ漢詩と南画

## 第二章 台湾近代美術の礎を築いた日本人画家

### 第一節 伊澤修二が推進した図画教育

### 第二節 石川欽一郎が総督府陸軍部通訳官として台湾へ赴任

### 郷原古統が台中中学校に赴任

### 第三節 木下静涯がインドから台湾へ

### 第四節

### 第五節 塩月桃甫が台北一中に赴任

### 第六節 石川欽一郎が台北師範学校に赴任

## 第三章

### 台湾美術展覧会誕生の萌芽

### 第一節 山本鼎の自由画教育運動

### 第二節 山本鼎の重要なファクターについて

### 第三節 官民挙げての一大プロジェクト 台展とその実情

### 第四節 官民挙げての一大プロジェクト 台展とその実情

### 第一節 台展の設立経緯「同郷説」について

### 第二節 第一回台展の入選結果 早くも浮上した審査員問題

### 第三節 台展の出品作に風景画が多いその理由とは

### 第四節 ローカル・カラーその解釈を巡って—ポスト・コロナリズムを中心に—

## 第五章

### 台展のインパクトとその後の美術運動

### 第一節 台展発足以降 次々に誕生した美術団体

### 第二節 秀逸だった日本統治時代の美術評論

### 第三節 独立美術展開催とその大きすぎる波紋

### 戦争末期から戦後へ—それぞれの情熱

### 第一節 戦時体制下の台湾美術界—戦争画を中心に

### 第二節 皇民化運動のさなか雑誌『民俗臺灣』が創刊される

### して—

第三節 日本人画家たちのそれぞれの戦後  
台湾美術展覧会(台展)第1回〜第10回審査員名簿  
資料

台湾総督府展覧会(府展)第1回〜第6回審査員名簿

1927年第1回台展以降に組織された西洋画の主

たる研究会と美術団体

1927年第1回台展以降に組織された東洋画の主

たる画会と美術団体

1895年―1945年台湾に渡った日本の美術家

たち

内容は目次がほぼ説明しているので、ここでは補足程度に  
したい。

第二章で森氏は、台湾近代美術の礎を築いた日本人画家と  
して石川欽一郎、郷原古統、木下静涯、塩月桃甫の四名を挙

げている。四名は「台展」や「府展」で審査員を務め、台湾  
美術の発展に貢献した。淡水を拠点にした静涯は教職に就か  
なかつたが、欽一郎、古統、桃甫が図画教師として台湾での  
美術家を多数育成した功績は大きい。

このうち、台北高等学校創立とともに同校の図画教師となつ  
た塩月桃甫は、台湾の原住民族(当時は「高砂族」と称した)を  
画材とすることが多かった。彼が毎号のように描いた学友会  
誌『翔風』(一九二六年三月―一九四五年七月、全二六号)の表紙  
絵、大西吉壽・佐山融吉共著『生蕃傳説集』(杉田重蔵書店、  
一九三三年)をはじめとする多くの書籍装幀からは、台湾へ  
の熱い眼差しを感じ取ることができる。個人的には、これら  
表紙絵や装幀についても本書で触れて欲しかった。

第三章と第四章は「台展」に関する論考である。台展の説

内山精也著

## 宋詩惑問

宋詩は「近世」を表象するか?

宋末元初の布衣詩人達をシャープに論じた宋詩  
は「近世」を表象するか?と宋詩と江湖 および  
宋詩に関わる評論 隨筆の四部構成。7000円

## 蘇軾詩研究

宋代士大夫詩人の構造  
12000円

齋藤 茂著

## 唐宋詩文論叢

天葩 奇芬を吐く

韓愈をはじめとする中晩唐期の詩人たちの新た  
な工夫のあり方と、宋代の詩人たちの継承のさ  
まを、李觀、白居易、劉禹錫、李商隱、蘇舜欽、  
蘇軾、王十朋等を通して縦横に論じる。  
副題は韓愈の詩句より採る。 6000円

京大人文研漢籍セミナー

## 7 漢籍の遙かな旅路

- 出版・流通・収蔵の諸相 中砂明德・矢本 毅・  
宮 紀子が語る漢籍の魅力。 17000円
- 1 漢籍はおもしろい 18000円
  - 2 三国鼎立から統一へ 15000円
  - 3 清華の三巨頭 18000円
  - 4 木簡と中国古代 19000円
  - 5 清 玩 文人のまなざし 19000円
  - 6 目錄学に親しむ 漢籍を知る手引き 17000円

研文出版 <税別>

東京・神田神保町2-7 ☎3261-9337  
<http://www.kenbunshuppan.com/>

立経緯の考証に始まり、官制の美術展としては最後まで東洋画と西洋画の二分野しかなかったこと、第一回台展で名だたる画家たちを落選させたことで第二回台展からは「日本内地」から大物級の画家を審査員として招聘することにした事情、審査員に台湾人が起用されることが少なかったこと、出品作品の傾向として風景画が多い理由などに触れ、興味の尽きることがない。実に説得力がある。

第五章は台展を契機として台湾で結成された美術団体の紹介、とりわけ独立美術協会が台湾美術の向上に果たした役割の大きかったことを明らかにした。また、台湾でも美術への関心が高かったが、その背景として良質の美術評論が多くあったことを述べている。

第六章は戦時下の台湾美術のいびつさを紹介するものだった。「日本内地」同様に、台湾在住の日本人画家もまた、戦時体制に取り込まれていったのである。彼らを戦争協力者として批判する研究動向に対して、森氏は反論する。美術を愛好する評論家としての冷静かつ客観的な姿勢を貫いていると感じられる。画家に寄り添って彼らの心の内を代弁していると言えよう。

また、森氏は『民俗臺灣』(一九四一年七月—一九四五年一月)を高く評価する。皇民化運動で失われていく台湾の民俗を記

録として残すべく、金関<sup>かねせき</sup>丈夫(台北帝大医学部教授)や池田敏雄(台湾総督府情報部嘱託)によつて発行された月刊誌で、総督府の皇民化政策と対立するものであった。この『民俗臺灣』を皇民化政策に迎合する雑誌と評価する研究者がいるが、これに対しても森氏は敢然と反論する。立石鐵臣は『民俗臺灣』表紙絵のほとんどを担当するとともに、文中でも台湾民俗図絵を多く残して好評を博した。

この第六章では、戦時下の台湾美術を巡る問題の深さ、それを語ることの難しさをつくづく感じさせられた。

ところで、立石同様に雑誌の表紙絵や書籍の装幀を手掛けることの多かった宮田弥太郎(宮田弥太郎、宮田晴光)という人物がいた。その宮田は『臺灣藝術』(一九四〇年三月—一九四六年一月、後に『新大衆』『藝華』と改題)の表紙の大半を担当した。さまざまな女性を描くことで華麗な世界を演出していった宮田は、次第に戦時色に染まる絵を描くようになっていく。再版の際にはぜひ宮田も論考に添えていただきたい。



本書の後半には資料五点が載せられている。

台展や府展の「審査員名簿」からは、「日本内地」から招聘した審査員、台湾美術界の中心人物、台湾人審査員の起用が明確にわかる。

第一回台展以降に組織された西洋画や東洋画の「研究会・画会・美術団体」からは、台湾での美術熱の高揚をうかがうことができる。

「台湾に渡った日本の美術家たち」からは、川島理一郎、藤島武二、松林桂月、梅原龍三郎、小澤秋成、石川寅治、有島生馬、岡田三郎助、竹久夢二、吉田初三郎、伊原宇三郎、飯田實雄、中川一政、矢崎千代二等々、その人数の多さに驚かされる。日本人美術家にとって、台湾が画材の対象として魅力的な地であり、自己の作品を展覧／販売する貴重な地であったことが伝わってくる。

これら資料を、森氏は『台湾日日新報』『大阪朝日新聞台湾版』などから丹念に拾い上げたのだ。この詳細なデータは労作であり、本文の理解を補完してくれるのでありがたい。

◇ 本書は、多方面から日本統治時代台湾の日本人画家を、そして台湾美術界の動向を扱っている。これまで日の当ることのなかった台湾美術を掘り起こしてくれた森美根子氏に感謝したい。そして、日本でも台湾美術への関心が高まること、台湾美術への研究が深まることを期待したい。

## 【注】

(1) 『翔風』の復刻版は南天書局（台湾）から出版されている。

(2) 『民俗臺灣』は、復刻版が台湾及び日本で数種も出版されており、今なお関心の寄せられている雑誌。南天書局からの復刻版は、検閲で削除された記事、発行されなかったグラ刷り（一九四五年二月）をも含み、解題や索引も充実している。印刷も製本も当時に近く再現されている。

(3) 『臺灣藝術』は最盛期には四万部も発行された月刊の娯楽雑誌、大衆雑誌。大衆的過ぎて読み捨てられ、戦争協力の色彩が濃厚であったがため戦後すぐに焼却されることが多く、現存は極めて少ない。拙著『臺灣藝術』とその時代』（村里社、二〇一七年）で詳述。

（かわはら・いさお 一般財団法人台湾協会）